
河岸 由里子

かうんせりんぐるうむ かかし

我流子育て支援論

～メディアの問題～

子育て支援に関わっている人なら誰もが、子ども達の社会に蔓延しているゲームやネットの問題に頭を悩ませていることと思う。今までにも各回の所々でゲームやネットの問題について述べてきたが、ここでまとめてみたいと思う。

小学生では多くの子がニンテンドーDSやPSPを持ち歩き、公園などで通信しながら遊んでいるし、中高生では、携帯電話、PSPやパソコンのネットゲームにはまり、夜中ずっとゲームをしていて、朝起きられず、不登校になっているケースも多い。

筆者もゲームをするので、ゲームの楽しさはわかる。一度始めたら、あっという間に時間が経つ。そのくらい、のめりこみやすく、興味を引き付けるように作られている。大人でも問題になるくらいのもなのだから、自分自身のコントロールも未熟な子ども達が、面白いゲームを短い時間で切り上げられるはずもない。如何にゲームをさせないようにするか、ゲームとの戦いはそれぞれ大変である。

保護者にネット環境を切って欲しいと頼んでも、中々すんなりとはいかない。大抵は「そんなことをしたら可哀そう」とか、大きい子では「暴れるから」と抵抗される。そこは、じっくりと、長い目でみて考えてもらえるよう、説得を続ける。

小さい子では、ゲーム機本体を隠したところ、見つけられたと言う話も聞く。家の中に隠しても、大抵は見つけ

られてしまうものだ。また、ゲーム機を母親が持って出たら、子どもがパジャマのまま裸足で追いかけてきたとの話もあった。ゲーム機を持っていかれることにそれ程の抵抗を見せるとしたら、依存の状態と言えよう。

中学生以降では、パソコンの接続コードやモデム本体などを持って行ってもらうが、お金を持っていると新しいものを買ってきてしまうので、インターネットの契約自体を切ってもらう事もある。

「暴れるから」と言われると、支援者としても中々お願いし辛い、「殴ってくるなら警察を呼ぶ」くらいの勢いが必要である。保護者が覚悟を決めねばならない程の問題なのである。こうした努力の結果、ゲームやパソコンが無くて平気になって、目つきも態度も随分と穏やかになった子を何人も見てきた。

ゲームやパソコンを与える上でしっかりルールを決める事、そして、ルールを守れない場合は、使わせないと言う事をはっきりと示し、守らせる力を保護者が持っていなければならない。そこには普段からの親子関係もしっかり反映されるので、要注意である。我々支援者は親子関係を見据えて、保護者が何をすべきか考えねばならない。親子関係が悪いのに、ゲームのことでさらに揉めさせてしまうわけにもいれないが、関係を維持したいからと子どもの言いなりになってしまう保護者には、心を鬼にしてもらわなければならないだろう。

子どもの問題だけではなく、保護者側にもゲームやパソコンの問題はある。

乳幼児検診場で保健師が見かけるのは、携帯電話に夢中で、子どもが何をしているか全く見ていない保護者。メールを打ったり読んだり、或いはゲームをしていたりする。また、子どものお守りにスマートフォンを与えて遊ばせている保護者も見かける。幼児がスマートフォンの画面をサクサクと操作して、自分の好きな画像やゲームを出して楽しんでいる様子を見て、「こういう機械の操作は簡単に覚えちゃうんです〜♪」と嬉しそうに語る。妊婦健診でもおなかの子に携帯電話等から音楽を聞かせている姿もある。

赤ちゃんに授乳しながら、母親がテレビや携帯をいじって居れば、赤ちゃんが母親の顔を一生懸命見つめていても気づかない。何か声を出して、まるで語りかけるような様子を見せても気づかない。これが繰り返されれば、赤ちゃんは母親の顔を見たり、母親に向かって声を出すと言う行動を控えてしまうだろう。

また、1歳半くらいの子どもたちは、とても興味が広がり、行動力が高まるから、保護者が携帯メールやテレビを見ていたり、ゲームをしていると邪魔をするだろう。そうすると保護者は怒鳴ったり酷い時は叩いたりする。子どもはじっとしていることを強要され、動き回れば罰を与えられ、じっとするためにDVD漬けにされる場合もある。こうした子どもを外遊びに連れて行く

と、のびのびと遊び、帰りがらなくなる。そこでまた保護者から詰られる。この繰り返しで、子どもは外遊びも積極的に行かなくなるだろうし、というより、保護者が連れ出さなくなり、結果として更にゲームやDVD 漬けになって行く。

こうして幼少期からスマートフォンやパソコンで子ども用のゲームに慣れ親しんでいる子どもが作られている。パソコンゲームも幼児期の子ども用の知育ゲームなるものさえ作られている時代である。保護者はこれ幸いとそういうものを買って与える。子どもの“知育”と言う名のもと、堂々とパソコンやゲームにのめりこませているのである。

小学校ではパソコンの授業があるので、パソコンに慣らしておこうという保護者の思いもあるだろうし、保護者が使っているのも当然のことのように子どもに使わせている例もある。しかし、パソコン画面に見入っている時間が長ければ、目にも身体にも良いわけがない。最近は目を保護するために画面にフィルターを付けている人もいるようだ。

筆者が子どもころ、テレビ画面が目が悪いからと画面に緑色のプラスチック製のフィルター板を付けていたのを思い出す。効果があったのか無かったのか分からないが、まあ、その時代のものよりは効果が実証されているだろう。

フィルターを付けてまでも、パソコ

ンを見させたいと思うことが本当に子どもたちのためになるのだろうか？視力の問題だけではなく、人と目を合わせて話すことへの不安も生む。画面ばかり見ている子どもにとって、幾ら画面が実物に近かったり、或いは実写であっても、生身の人間とは違う。

ニンテンドーDS やこうしたパソコンゲームを幼少期から使っていれば、小学校に入るところにはゲーム中毒になっている子も見かける。背中が丸まり、顎が前に出た姿勢の子どもたち。ゲームはリセットできるが、現実の行動はリセットできないことに苛立ち、誰かのせいする様子も見られる。コミュニケーションが苦手で、同年代との関係性が育たないため、猶更ゲームにのめりこむ。悪循環である。

パソコンやゲーム、テレビの弊害はまだまだある。

テレビよりはパソコンの方がやり取りできると思うが、所詮プログラムされたもので、子どもの自由な発想や創造力を育てることができるのか疑問に思う。様々な学者がプログラムを考えているのだろうが、発見や発展の元になっている発想は、もっと奇抜で自由な物で、プログラムされたものから生まれるものではないと思うのだ。

テレビがデジタル化されたお蔭で、テレビの台数が減った家庭もあるようだが、ゲーム用やビデオ用に別のテレビがある家庭も多いし、子ども用と大人用と分けている家庭も多い。そうなると、昔のように、テレビ番組一つで

揉めることがない。どうやって上手く自分が見たいものを見られるようにするかを画策することは、例え兄弟間の事といえども、頭を使う。相手の気持ちを理解し、言葉巧みに自分の思い通りの話にもっていかねばならない。とても高いスキルである。そうしたスキルを身に着けられない状況にあるのだ。

父親が帰って来れば誰もが黙ってテレビ番組の選択権を父親に委ね、小さな事とは言え一家の主と言う意識が自然にできていた時代とは異なり、近頃では、むしろ父親が別の部屋に追いやられているケースが多いくらいである。

テレビをみたり、ゲームをする時に、兄弟がいれば必然的に取り合いと言う揉め事が起こるが、これは前述のように折衝スキルを身に付ける訓練になる。しかし、揉め事を嫌う保護者は、兄弟が揉めずに済むようにとそれぞれが別々のもので遊べるようにしてしまう。DS は、保護者も含め各自1台持っているという家族も多い。

ただでさえ最近の世の中は、さほどコミュニケーションスキルが無くても、生活に支障が無い事が多いのだから、せめて幼少期から、テレビ番組の取り合いで喧嘩になるとか、おかずの取り合いで揉めるとかあっても良いのではと思うのだが、そうはいかないようだ。

更に、兄弟を公平に扱うと言う弊害が、兄が兄らしく扱われないという現象をも生んでいる。弟や妹が兄の名を呼び捨てにしているも平気なだけでなく、物も公平に与えられる。これでは揉めるはずもない。(あまりにも弟や妹

が兄や姉を馬鹿にしている場合に、筆者は保護者に、「ご飯をよそう時には、長子からとか、兄と弟でおかずの量に差をつけるなど、兄弟間の差をあえてつけてください。」とお願いすることがある。もちろん反対に「兄のくせに」と長子であることを言いすぎてつぶす事例もあるが・・・)

そして、揉めないことを善しとされると、揉めることにイライラする保護者が増える。

子どもは揉めるのが大事だと思っているのは筆者だけか？揉めたり喧嘩したりしても、仲直りが出来るのだと言う事をしっかり小さいうちに学んでいけば、思い通りにならないことに腹を立て、嫌な奴、邪魔な奴は排斥し、消してしまえと言うような、ゲーム感覚の問題行動、いじめや殺人が起こる確率は減るのではと思うのである。

さらに、子どもたちが視覚優位で、聴覚による認知力が比較的落ちているような気がするが、これもメディアの発達弊害ではないだろうか？

近年、ラジオを聴く人が減った。ラジオは想像力を膨らませる事が出来る。車ではラジオや MD・CD が普通だろうが、テレビ機能も備えたナビが搭載され、運転者はともかく、同乗者はテレビを楽しむこともできるようになっている。

本も、IPADなどで、読めるようになっていたので少しは本好きを増やせるのかもしれないが、子どもたちに聞くと、本と言えば漫画と言う子も少なくない。学校では読書タイムを設けて、

子どもたちに読書をさせているし、読み聞かせなども積極的に取り入れている。こういう活動は子どもたちの情操教育にはとても効果があるだろう。文章から、場面を想像し、展開を自分の頭で再現していくこと、その時こどもは脳の様々な部位を使っている。視覚的に与えられるばかりの、テレビ情報やネット情報とは全く違うのだ。

また、テレビ報道も気になる。教師の権威を失墜させたのも、政治に対する信頼を無くさせたのも、将来に対する夢や希望を持たせにくくしているのも、テレビのせいと言っても過言ではないと思う。

一人の教師が何か問題を起こせば、朝から晩まで教師の問題を繰り返し報道し、まるで教師全体が悪いかのような錯覚を覚えさせる。犯罪にしても、自殺報道にしても、事細かに報道し、大人だけではなく、子どもたちも見ってしまうと言う事を考慮していない。いじめ自殺があれば、子どもたちに平気でマイクを向ける。政治家は、国会答弁で平然と野次を飛ばす。学校教育では、「人が話しているときは静かに聴きましょう」と教えているのにである。大人の政治家が人の話を聴かず、批難、罵倒する姿をテレビで見せていて、子どもたちによい教育が出来るのか？

大人の世界と子どもの世界の境界が曖昧な中で、テレビ報道やネット情報は、嘘も本当も糺交ぜに、これでもかと言うほどしつこく、声を大にして放

送している。子どもたちの現実検討識にどれだけ影響するか分からない。正しいものを正しいと、善悪の区別を覚える時期に、わけのわからない報道に毒されて、善悪の判断さえ曖昧になってしまっている。

バラエティーなどで目にするいじめの様なショーも、面白おかしく報道されていれば、子どもたちは自分たちも楽しそうだからやってみようとなって仕方がない。その結果どれだけ友達が傷つくかには思い至れないだろう。テレビでは堂々と放送され、誰もが面白がっているのだから。

報道統制されるような世界になってほしいと言う事ではないが、もう少し、報道する側が子どもへの影響を考えて、報道内容に対し、18禁のように、年齢制限を設けても良いのではないだろうか？そして、保護者がそれを管理監督出来るようにしなければいけないのではないだろうか？電波を止める事が出来ない以上難しいことは分かるが、認識装置がこれだけ発展している現代なら、子どもの顔認識、登録内容などによってみられるテレビやパソコン操作など、制限されるように作る事が出来るのではと思う。

こうした、大人の情報や娯楽に、無防備にさらされている子どもたち。本来なら、思春期に少しずつ、大人の世界に気付き、ずるさや悪さを知るべきなのに、幼児期から大人の世界の出来事に巻き込まれている。これでは、子どもたちが「大人になりたい」と思う

はずがない。どれだけ子どもの世界に、大人の世界を入れ込むのか？

以前こんなことがあった。小学校低学年の男児が女児に対し性的ないたずらをした。単なる興味本位ととるには問題があった。どう考えても、加害児童には今の時期に得なくて良い情報が入っていたとしか思えないのである。

「子ども部屋にフィルタリングを掛けずにパソコンを置くことは、子ども部屋に20人のやくざと5万冊のエロ本を放り込むこと」とおっしゃった方がいらした。

子どもだけが使うパソコンにはフィルターを掛けている家が殆どだとは思いますが、大人用と子供用を分けているから安心とは言えない。子どもたちはロックを案外簡単に外している。暗証を覚えられないからと、誕生日にしたり、書き留めておいたりする家が多いからである。

ロック外しで思い出したが、こんな事件もあった。小学校高学年の女児が、父親の携帯のロックを外し、浮気の証拠となるメールや、卑猥な写真を見てしまったのである。この子どもはショックのあまり、父親にもものすごい嫌悪感を抱いた。当然の事だろう。子どもには見られないと思っていたのだろうが、甘いのである。

このように、子どもたちの社会には、ネットやPCがすっかり入り込んでいる。

ニコニコ動画など、子どもたちに人

気のサイトを我々大人は見てチェックしているだろうか？パソコンのオンラインゲームを、チェックしているだろうか？子どもたちがどんなものを見ているか、確認しているだろうか？

携帯サイトは、学校裏サイトや中傷メール、チェインメールなど等、問題だらけである。最近でこそ、ネットパトロールなどが盛んになってきているが、ネットを使った誹謗中傷はあっという間に広がり、酷い目にあった子どもたちも多々いた。

中学生くらいになると、携帯ネットで知り合った者同士が付き合いを始めることもある。その中で、互いの性器を写メ（カメラ付き携帯電話で撮影した画像を添付したメール）で送りあったりする。保護者は、そんな写真を撮っていることなど考えもしない。

携帯サイトやPCサイトの危険性についてのDVDも作られ、子ども達が学ぶ機会をあえて設けている学校もあるが、後手に回っているので、この効果が出るには、まだ時間がかかるだろう。

与えられる膨大な情報から、取捨選択して必要かつ有益な情報を得るための教育も大事だが、それ以前に、子どもの場合は保護者が規制をかける必要があると思っている。休みの日は一日20時間近くもゲームをしている子から、ゲームを取り上げ、違う遊びや会話、読書などを楽しむようにしたところ、キレやすさが改善され、穏やかになった子供を何人も見ている。

人によっては、ネットやゲームで他

人とつながっている場合は、そこが唯一の外界との接点であるから、切らないようにという人もいる。確かにそういう見方はあるだろうが、筆者としては大人がコントロールできない状態で与えておくのは

反対である。中高生ともなれば大人のコントロールは及ばなくなるので、小さいうちが大事だろう。ゲーム代もネット代も、保護者が出しているのなら、それを切る権利は当然保護者にあるが、切れない人のなんと多いことか。

では、今、我々支援者は一体何をすればよいのか？

子どもたちには無限の想像力・創造力がある。玩具は殆どいらない。子ども達は、身体を使い、言葉を使い、目の前にあるものを使い、人を使って、様々な遊びを展開していくことができる。我々はそれを見守ったり、相手をしてあげるだけでよいと保護者に伝えよう。

また、最近の子どもの絵が稚拙なことから、もっともっと絵を描かせることも必要だと思う。その際、自由に描かせることが大切である。テレビも、ゲームも、玩具も減らし、保護者や兄弟、友達など、生身の人と向き合っ、一緒に遊びを創っていけるよう、助言していくべきではないか。

子ども部屋にテレビやパソコン、ゲームなどを置かない、食事の時はテレビを消す、つけっぱなしはやめる等、我々支援者が一生懸命伝えても、「食事中父親がテレビを見るのでそれは無

理」という家もある。保護者が正しい見本を見せることで、子どもは正しい行動を学ぶ。父親も食事の時だけは、テレビを我慢すべきだろう。

保護者がゲームばかりしているという家もある。テレビばかり見ている保護者もいる。子どもたちの行動修正ばかり考える前に、今一度大人の行動を見直さねばならない。それが我々支援者の仕事だと思う。

携帯ゲーム、パソコンゲームといったゲームの問題、ネットやテレビその他による情報の扱いの問題など、子どもを取り巻くメディアの問題は大きい。最近メディア・リテラシーという言葉が良く聞かれるようになった。メディアは使い方で、毒にも薬にもなるのである。子どもたちのために、大人である保護者がメディアを管理できるよう、支援者として見守り、助言して行かねばならない。

かつてパスカルは「人間は考える葦である」と言った。人間とは孤独で弱い生き物だが、考える事が出来ることは偉大であり、尊厳があるという意味とされている。それなのに、「考えること」が苦手になり、与えられる情報のみで防御し、多すぎる情報に振り回され、臨機応変さを失いつつある人たちの中で、そして更に溢れる情報の中で育つ子どもたちを、今のうちに何とかしないと、この国に未来はないのではとさえ思うのである。

次回、最終回として、境界について思う事をまとめてみたいと思う。